

# *The Pickwick Papers* の成功

## —その社会的背景—

西 條 隆 雄

### I

*Pickwick Papers* は2000部売れて利益が出る計算であったが、本屋も読者も購読しそうにないとみた出版者は第1分冊を1000部印刷して、うち400部しか製本をしなかった。第2、第3分冊もさして読者の注目を引かなかったが、第4分冊になって Samuel Weller が登場すると、俄然人気を博しはじめた。 *Literary Gazette* の編集長 William Jerdan はいち早くこれを認め、Weller 語録を掲載してその魅力をたたえた<sup>1</sup>。大学生をはじめ広くよまれていたこの雑誌が作品の人気拡大に貢献したことは確かであろう。以後、Sam と主人との人間関係が進展するにつれて、Sam の性格の重要さが益々深まってゆき、作品の主要テーマの一つに発展するが、喜劇的人物としてだけでも、彼は魅力あふれる存在であった。売れゆきは急速にのびて、第9分冊14,000部、第14分冊26,000部、第17分冊29,000部、最終号では40,000部と飛躍的にはね上った<sup>2</sup>。

ところで、小説購読者4万人とは、当時の出版界にとって天文学的な数字であった。加えて、この4万人がありとあらゆる階層、年齢の人々であったことも注意すべきである。医者が往診途上に馬車の中で読んでいたとか、判事が陪審員の評議中に判事席で読んでいたとか、あるいは中産階級の家では、父親が家族の前で音読をする前に自室でまづ読むのが習慣であるが、むこうでふき出したくなるのを必死でおさえしている様子をして、

家族の者は早く聞きたいという衝動をおさえかねている、といった逸話は数限りない。National Magazine (December 1837) によれば<sup>3</sup>、肉屋の小僧が肩に盆をのせて *Pickwick* の最新号をよんでいるし、召使、女中、煙突掃除小僧等、あらゆる層の人が *Boz* を読んでいと記している。そして街頭には、ピックウィックと銘うった帽子、杖、葉巻、陶器類が並び、ウェラーズボンが売られた。

*Pickwick* の爆発の人気はすぐさま剽窃物を生み出し、版画、芝居、音楽、小説、雑誌にその名はあふれた。版画の流行にならって作品中の人物を集めたさし絵集 *Pickwick Characters* (c1837)、名前だけ利用して作品とは無関係の *Lloyd's Pickwickian Songster* (1837)、あるいは“*Boz*”ならぬ“*Bos*”編集の *The Penny Pickwick: The Post-Humorous Notes of the Pickwickian Club* (1837)、“*Poz*”編集の *The Posthumous Papers of the Wonderful Discovery Club* (1838) が出て、莫大に売れた。剽窃物の中では秀逸とされる G.W.M. Reynolds, *Pickwick Abroad: or the Tour in France* (1837年12月より *Monthly Magazine* に連載) の成功をみて、*Pickwick in Boulogne* (1838)、*Pickwick in America* (1838)、*Pickwick in India* (1840) が相つぎ、1852年の時点でさえ、ピックウィックと名づければ剽窃物で採算がとれるほど、彼の名前は国民の中に深く浸透した<sup>4</sup>。

Dickens が24才の時に発表した処女小説が、一体何故これほどの大興奮をまきおこすに至ったのであろうか。ここではその成功の理由を、(1)当時の人々に親しまれていた文芸様式と *Pickwick* の関係、(2) 1820年代から1830年代にかけて急速に広がった活字文化の波、(3)当時の社会風潮、もの考え方、との関連において考えてみたいと思う。

## II

*Pickwick* には、Fielding, Smollett, Goldsmith 等、18世紀小説の影

響<sup>5</sup>が濃くみられるが、メガネをかけた太っちょの老紳士が国民的英雄となった背景には、19世紀初頭に一般大衆に親しまれていた大衆文芸が大きく関係してはいないであろうか。

例えば、さし絵付きの小説は *Pickwick* が最初であるが、当時小説とは3巻本で出すものときまっており、さし絵はつげなかった。それで *Pickwick* が出はじめても、出版界はこれを小説でないと考え、たいして顧慮しようとはしなかったし、評論界でもこの新しいジャンルをどうよんでいか戸惑っている状態であった。だが、これが大成功をおさめることによって、小説出版は完全な改変を経ることになる。これを機にさし絵は小説の必要不可欠部分となり、分冊出版形式がヴィクトリア朝小説の定型となる<sup>6</sup>のである。

1836年12月、*Pickwick* が第9分冊を出す頃、『アセニーム』紙はこれを「Smollett 2ポンド、Sterne 3オンス、Theodore Hook 一握り、Pierce Egan のダッシュ使用」にすぎないと書評した<sup>7</sup>。1828年に創刊して以来、数年間でヨーロッパ有数の文芸紙として名声を得ていた『アセニーム』紙の評価は厳しかったが、「小説」とはみなされず、また評論界の小説批評基盤が脆弱であったことを考えれば、この書評はさして驚くには当たらない。

ところで『アセニーム』紙の評論家が Pierce Egan (1772-1849) の名前をあげていることに注意したい。Egan といえば、彼の *Life in London* (1821-3) は出版当時莫大な人気を博した作品であり、*Pickwick* の出る頃には既にすたれていたとはいえ、数々の陽気な名場面とその色刷さし絵は人々の脳裏に強烈に焼きついていたと思われるのである。つまり小説以前の大衆文芸である。そして更にその10年前、Rowlandson のさし絵をつけた William Combe, *Dr. Syntax's Three Tours* (1810-21) は Egan と同じく「国民的歓迎」をうけた大衆文芸であった。いま *Pickwick* の「国民的歓迎」を思う時、Dickens はさし絵と本文とを不可分とする、Combe や Egan の大衆文芸世界の伝統に立脚していることを考え合わせ

る必要がある。これら2作品及びその類似作品をながめることによって *Pickwick* 誕生の背景がかなり鮮明になると思われるのである。

*Dr. Syntax* は、当時の有名な画家 Rowlandson が出版社に一連の絵を持ちこんだところからはじまる。これは、牧師兼教師で美術をこよなく愛している老人がドン・キホーテにも似た美的探究の旅に湖水地方へ出かけるというものであった。そして、この絵に韻文解説文をつける人として William Combe (1741-1823) が選ばれたのである。彼は当時70才、人生の浮き沈みをへた経験豊かな彼の筆は、“write the text up to it”<sup>8</sup> という条件下ですらすらと滑稽旅行記を綴ってゆく。この旅行記はすぐさま掲載雑誌 *Political Magazine* のよび物となり、人がよい故に易々と騙され失敗をくり返す高潔の士 *Dr. Syntax* は、たちまち人々の口にのぼり、シンタックスと銘うった帽子、かつら、服が街頭に出まわった。そして、*Tour of Dr. Syntax through London* (1820), *Dr. Syntax in Paris* (1820)をはじめとする剽窃物が相ついで出された。

*Dr. Syntax* は無邪気、知性、潔白、教訓癖、女性好き、画家、健筆、能弁をすべてそなえた人物で、彼がおかれたシチュエーションの中から喜劇はひとりで生まれてくる。作品中、場面場面はすべて独立しており、従ってプロットが展開してゆくことはないが、それだけに喜劇の典型的場面がここには密集しているといえるであろう。

宿の窓ガラスに書きなぐってある詩片を筆写している時、女中のさげたやかんが、彼女を追ってきた恋人が抱擁したはずみで、*Dr. Syntax* のくつに熱湯を注ぎこむ。ある時はスケッチをしていて雄牛に追っかけられる。湖の畔で腰をおろした石がぐらつき、湖に落ちこんで泥水だらけになる。かつらを巣と思った蜂の大群に追われ、避難の為川の中に飛び込むといった数々の災難が彼を待ちうけている。あるいは、軍の演習をみに行った時、かつては従軍し名誉の傷さえ負った彼のおんぼろ馬が、突如トランペットの音に往時の精神をよみがえらせ、もう死ぬと半ばあきらめながら

しがみつく Dr. Syntax を背に、丘の上まで疾駆する場面 (Canto xi). 恋の病にとりつかれた乳搾りの乙女にやさしく同情を示していると、母親がこれを聞きつけ、淫らな心をもっているとさんざん悪口をあびせる場面 (Canto xviii). 女子寄宿学校で生徒たちに長々と人生訓を説き満足にひたった翌朝、従僕の Pat が一女性を口説いているのをみつけ、これを激しく詰問 (Canto xxxii). また、妻を亡くした Dr. Syntax が未亡人 Hopeful に求愛する場面のドタバタ騒ぎ (Canto xxix) もある。

*Pickwick* を読んだことのある人は、ここに数々の類似点を認めるであろう。この作品が Dickens の念頭になかったとはいきれない<sup>9</sup>。滑稽旅行記こそは人民の親しむ文芸様式であり、*Dr. Syntax* を歓迎した人々の熱狂的な受け入れ方を彼は肌で知っていたにちがいない。そして、1830年代にこの様式はまだまだ流行をみせ、人気を博していたのである。

*Dr. Syntax* の10年後、人民の熱狂的歓迎をうけたのは Egan の *Life in London* であった。当時上流階級の間には、狩猟、競馬、拳闘等、広くスポーツに関係した作品を好む風潮が強く、その方面の雑誌 *Boxiana* の編集長をしていた Egan は、「もしロンドン人が田舎や户外运动に関する書物にやっきになるのであれば、田舎の人々あるいはコックニーを語るロンドン下町の人々ですら、『ロンドンの生活』について多少とも知りたいとは思わないであろうか<sup>10</sup>」と考える。この考えが Cruikshank 兄弟のさし絵を伴って実行に移され、1821年7月15日に第1分冊(1シリング)が出された。はからずもこれが人々の待ち望んでいた種類の文芸の鉞脈を掘り当てることとなり、成功は爆発的で史上例をみず、たちまち都市も田舎をも席捲してしまった。

これがいかに人々の好みをほりあてたかは、海賊版が出版後10時間とたたないうちに Catnach 出版社から出された<sup>11</sup> ことから推察できるであろう。すぐさま *Real Life in London* (1821-2; 6ペニ分冊) が 'By Amateur' (John Badcock?) によって出され、好評を博して *Life in*

London の強力なライバルとなり、*Life in Paris* (1821) が剽窃物として出版された。版画、歌集、茶盆、カギ煙草入れ、ハンカチ、皿、扇子には作品の主人公が描かれ、仕立屋、帽子屋、靴屋はコリンシアン様式、トム・ジェリー型しかすすめない。9月には Barrymore が脚本した *Life in London* の芝居が上演され、11月には Moncrieff のそれが上演されると、これが演劇史上例をみぬ人気をよんで Adelphi 劇場では300日をこえる連続上演となった。他に Charles Dibdin, Farrell, Douglas Jerrold による脚本も出て、1822年にはロンドンの10劇場で *Life in London* が上演されていた<sup>12</sup>。Egan の作品からは、なんと67の派生出版物が生まれた<sup>13</sup> のである。

当時、ロンドン中はこぞってこの作品を読んだ。これは王宮から公園、酒場、はては牢獄に至るまで、ロンドンの上層下層生活をあまねく伝え、当時の社会、風俗、流行、軽薄さを最も典型的に写した書物であった。3人の主人公は粹で優雅で、しかもはめをはずした遊興三昧にふける。彼等の威勢のよさ、華々しさがロンドン中いたるところで模倣され、騒ぎ、飲酒夜警を殴り倒すなどの不道徳行為が街中、いや英国中でくり広げられた。時代が野卑な性格をぬけきらず、洗練を尊ぶまでに至っておらなかったの、*Life in London* の度外れの乱行は是認されることとなった。加えて芝居の大当りで、芝居の言葉がそのまま日常生活に流れこみ、貴顕叔女が平然と俗語を語り、からかい、あざ笑いは日常茶飯事となった。

こうしたふしだらさ、不道徳性を攻撃しない人がいないわけではなかった。教会の説教壇ではしきりにトムとジェリーをこきおろしたし、宗教冊子協会の人々は、芝居小屋の入口を固め観客を入れないようにしたという話もある。だが、こうした行為も作品の人気を抑えるどころか、一層高めるだけであった<sup>14</sup>。

不思議なことに、この大人気も10年後にはすっかり消えている。当時の社会を写したものとして絶賛をあげたが、「文体は好ましいものではない」<sup>15</sup>

上に、「Egan には文才は一かけらもない」<sup>16</sup> ところが、時の変遷をくぐりぬけることが出来なかった所以であろう。また、*Pickwick* の分冊本を読んだ人が、これを “only a new train of Tom-and-Jerryism” ときめつけ、嫌った<sup>17</sup> といわれるが、確かに最初の数分冊には拳闘、飲酒、騒ぎ、決闘、ベテン師登場といった摂政時代好みの趣味があふれていて、これを卑俗とよぶ新しい時代がすでに到来していたのである。しかし Cruikshank 兄弟のさし絵は人々に忘れ得ない印象を刻んでいた。一場所に深く沈潜せず、転々と場面をかえてゆく本文は、人々の脳裏から消えていつしかさし絵に吸収されるようになり、人々はさし絵をみて Egan の世界をあまねくよみとったであろう。

Mr. Pickwick の直接のヒントを与えたのは、どうやら Robert S. Surtees (1803-1864) が *The New Sporting Magazine* に連載した *Jorrocks's Jaunts and Jollities* (1831-4) の主人公らしい。彼 Mr. Jorrocks は、ロンドンの “a substantial grocer in St. Botolph's-lane” (p. 17)<sup>18</sup> であるが、大の狩猟好きで土曜日にはきまって Surrey へ狩猟に出かける cockney sportsman である。俗語をまきちらし、たちの悪い冗談をくり返し、酒に酔えばどこまでも男性的意気地を通すが、根は “frank, hearty, open, generous and hospitable” (p. 40) で、“an elderly cherub without wings” (p. 22) と表現されている。最後にはボートの転覆で溺死したかと思っただが、奇蹟的に蘇生し、病床にあってなお冗談をとばしながら、いつまでも冒険心を失わぬ意気軒昂なところをみせている。

とりわけ指摘される第3章は、主人公の不法侵入をめぐる裁判の場面である。彼の温和な顔、卑賤の身ではなく狩猟家であること、立派な評判をもった食料品商であることを力説して彼が罪を犯すはずはないと弁護したが、原告側は、Mr. Jorrocks を極悪人呼ばわりし、社会通念に欠如しているとか、その他並べうる限りの作り話をもち出して反撃した。ついには無能な判事達の採決で、“a toe, a whole toe, and nothing but a toe”

(p. 59) だけでも充分有罪だと判決をいい渡される。Pickwick にこれと類似したパタンが見られることはいうまでもないであろう。

Jorrocks の陽気な冒険話は大きな成功をみせ、この成功をみた Robert Seymour (1798-1836) が cockney sporting plates を出版社に持ちこむことになった。当時彼は滑稽諷刺画の面では指折りの画家であり、イズリントンに住んで *Figaro in London* とか *Comic Magazine* に投稿していた。場所がらスポーツの観察に最適で、1833年から *Humorous Sketches* を描き、penny-a-liner の文をつけ1部3ペンスで売り始めた。装備は一流、腕は三流のスポーツマンのいろんな姿態を描いたものである。これが大層人気をよんで、これによって彼の名は有名になった。また、この成功で廉価出版の明るい可能性が開けたのであった<sup>19</sup>。しかしEverittによれば、彼には「絶対に天才的なところはない。John Leech に顕著にみられる発明の才はなく、滑稽、真面目、現実、恐怖等、心に浮かぶどんな概念をも現実化する George Cruikshank の生き生きした創造力をもたない。彼の才能は確かにすばらしいが、狭い溝に走りこんでしまっており、その傾向は *Humorous Sketches* 等にもみられる。彼は、たえずロンドンなまり及びコックニー物を書いて諷刺したいと思っていた。そして、決して新らしくも野心的でもない、一連のそういう絵を書き、文人による適当な文章をそえたいと思っていた<sup>20</sup>」のである。

Seymour は、文人が絵の解説文を書くという当時流行していた形式を念頭におき、一方作家としての自立をめざす Dickens は従属的地位に甘んじることなどは考えておらず、出版社は出版社で大した成功は予期していなかった。従って *Pickwick* は、画家、作家、出版社ともに三者三様の思惑をもってはじまった。*Pickwick* は Seymour によって誕生したことは事実だが、彼のさし絵はもはや陳腐にすぎ、また *Jorrocks* を念頭におけば、経験のない Dickens が狩猟をはじめとするスポーツに関して、これを上回ることはできなかつたであろう。Cockney sportsman である



Winkle を取り入れはしたものの、Dickens と Seymour の間に亀裂が生じるのは、当然のことであった。

以上、*Pickwick* が生まれる以前に一般大衆がどういう形の文芸に親しみ、これを受け入れていたかの例をみてきた。*Dr. Syntax* は『ドン・キホーテ』が形をかえたものであり、*Jorrocks* には“Quixotic”という語が、また *Life in London* には“Hogarthian”という語が多出するところから、田舎を旅しようとロンドンをねり歩こうと、ともかく人情、風俗、珍奇を求めるピカレスク紀行が当時は圧倒的に好まれたのではないか。しかもなじみの場面は、Rowlandson, Cruikshank 兄弟, Alken, Seymour といった名だたる画家によって不滅の印象を脳裏に刻みこまれている。Dickens がこういった伝統をいかに巧みに吸収し止揚してゆくか、そしてトム、ジェリー、コリンシヤンの放埒な男性的世界がいかに *Pickwick* のおだやかな世界に変容してゆくかは、彼の処女小説の成功に大きく関係している。*Pickwick* は即興的に始まったとはいえ、そこには19世紀初頭に人気を博した文芸が濃厚に流れている。そして作家は昔のベストセラーを単に再現するのではなく、作品はもちろん、剽窃物、芝居、歌などを通して、民衆の心の奥底に沈澱した人物、場面、事件、感情——いいかえれば民衆の心——をどこまでも追及し、それを時空をこえた存在に昇華しているのである。

### III

小説とは3巻本で出され、1000~1250部印刷したうち1000部は Circulating Library (貸本業者) が買い上げる時代にあつて、*Pickwick* の購読者数40,000人というのは驚くべき数字である。この爆発的な売れゆきについては、活字文化の普及という面からも考えてみなくてはならない。1820年代の後半及び1830年代には、大衆が政治的、文化的読み物を、史上前例のない規模で求めるのである。

19世紀初頭、書物は高価であったが、Scott の小説が大人気をよび、彼の小説はとほうもない値段をつけて、*Ivanhoe* (1820) が 30 シリング、*Kenilworth* (1821) は 31.5 シリング (1 ギニ半)<sup>21</sup> にはね上り、これが新刊小説の値段をきめてしまった。1840年まで58冊の新刊小説が出るが、そのうち51冊まではこの値段をつけている。ナポレオン戦争時の重税と、その後の物価高騰ゆえに中産階級は購売力を失い、読者は *Circulating Library* に通うようになった。従って、ここに通えない人々は、英国作家の新作には接することができず、古典の分冊出版又はリプリントを通して書物に接しうるのみであった。

読者数を広げようとする努力は、1820年代後半、まず廉価のリプリントを出すことによってはじまる。Archibald Constable は、1827年1月から“Constable’s Miscellany”を企画し、3週間に一冊ずつ新本を出版し、しかも3シリング6ペンスという破格の値段でこれを販売した。これと相前後して「実用知識普及協会」が創設され、微積分、醸造方法、年金計算など、主として職工・技師及びその家族を対象として実用知識の普及につとめ、更に加えて歴史、自然科学、旅行記などの読み物を提供した(4シリング6ペンス)。1829年には Thomas Cadell が絶大な人気をもつスコットの全集を、各巻わずか5シリングで出版し、1831年には Colburn and Bentley の“Standard Novels”が、各巻6シリングで出されるに至った。こういった努力によって、一般読者の急増は約束されるかにみえた。

しかし、3巻本の値段に比べれば廉価とはいえ、5シリングといえは大多数の労働者にとってはとても手の出ぬ値段であった<sup>22</sup>。加えて、内容的にも歯ごたえのあるものばかりで、一般大衆の好み、条件からは、はるかに隔たっていた。彼等は印刷物の購読に対して、週に1ペニ又は2ペニしか使うことができず、①宗教冊子類、②chap-books (伝説、民間伝承、歴史上の人物記、詩等) ③broad-sides (殺人、処刑、駈落等を記したもの。James Catnach が有名)、④bluebooks (吸血鬼、悪霊物語をのせた 36

～7ページの青表紙本)、⑤ almanacks (暦、滑稽詩、旅行記、連載物等)を買って<sup>23</sup>、単調で長時間の労働をいやしていた。

一方新聞は、当時急進調の新聞を減ぼす目的で重税がかけられ、1815年には新聞印紙税が4ペンスにはね上った。従って Cobbett などは、課税対象であるニュースをすて、もっぱら個人的見解に集中することにより、印紙をはらずに *Weekly Political Register* を出している。だが、過激な自由思想の拡大をおさえるため、当局も遅れをとってはいない。1819年“Six Acts”を出し、「ニュース又はニュース解説を含み、26日毎に1回又はそれ以上刊行され、2枚又はそれ以下、税ぬきで6ペンス以下の価格<sup>24</sup>」のものを新聞とみなして課税対象とした。これによって、政府の攻撃、憎悪、軽蔑をのせる新聞は追放されることになり、従って、この税の徹廃をめざして、つまり“tax on knowledge”廃止にむかって、1830年代の前半、激しい戦いが展開されることになる。

日刊新聞7ペンスというのは、高すぎて購読できなかったのが実情である<sup>25</sup>。1815年から1835年までの間、1人当りの新聞消費数はほとんど横ばいとなっている<sup>26</sup>。加えて、1日の労働時間が14～16時間で、更に残業さえある場合には、活字を追う時間はなく、大部分の労働者にとって、活字に親しみうるのは日曜日くらいであった。

そこで、日曜新聞が大きな意味をもってくる。創刊は日刊新聞に30年の遅れをとったものの、着実に購読者を確保し、1829年には日刊が28,000部(7紙)を売ったのに対し、日曜新聞は週110,000部(6紙)を売っていた<sup>27</sup>。8.5ペンスの日曜新聞は、ニュースに加え、週間のスキャンダル、殺人、墮落などをも刺激的に報道し、また競馬、レスリング、懸賞狩猟等のスポーツ記事、流行、機智、実人生の面白い出来事を豊かにのせることによって、中流階級から貧しい人々の間に届いた。ここには、当時の一般大衆が読んでいた類の読み物が、ふんだんに流れこんでいるともいえるであろう。内容の高下は別として、一般大衆の間に新聞をよむ習慣が急速に広がり、苦

しい労働、孤独からの解放感を与えるもの、精神、想像力をつなぎとめる手段として、活字が注目をあびてきたのである。

1830年になって、印紙税に対する挑戦、抵抗が相つぎ、印紙を貼らずに低廉な値段で刊行する新聞、雑誌が頻繁に出はじめる。一方では健全で有用で、好ましい精神教育の糧を与えようとする、理想・改革に邁進する人々がいれば、他方には他紙との張り合い、政府攻撃に終始して労働者階級を扇動する人々がいた。そのような中で、1832年3つの低廉な雑誌があらわれ大成功をおさめる。*Chambers's Edinburgh Journal* (1.5 p), *The Penny Magazine* (実用知識普及協会編, 1 p), *Saturday Magazine* (キリスト教知識伝播協会編, 1p) がそれである。実用知識、歴史・科学知識、詩、随筆、小説等をのせたもので、読み物の量と質にうえていた一般大衆は、1~1.5ペンスで眼前に与えられた新しい雑誌に殺倒した。人気は急速に広がり、*Chambers's* は50,000部、一方さし絵をふんだんに入れた *Penny Magazine* は200,000部の売れゆきを示した<sup>28</sup>。

この3誌の成功で、たちまち廉価出版の採算可能性が生まれ、ロンドンでは至るところに印刷屋が軒を並べ、以後しばらく英国は新聞、雑誌洪水の時期を迎えるのである。中産階級、労働者階級に広がっていったこれら3誌は、違法ではあったが法の適用をうけず、新聞印紙税はどうやら政府攻撃を鈍らせるために存在したのであることを物語っている<sup>29</sup>。

ともかく、自ら精神的、情緒的活力をとり戻すため、あるいは実用知識を通して自己の人生を開拓するため、あるいは娯楽として、読書というのが日々の生活の中で大きな位置を占めるようになってきたことは事実である。*Pickwick* が40,000部売れた時、そこにはウエリントン公のような上流人士もいれば、12人で1ペニづつ出し合って分冊本を購入し、回し読みをした労働者たちも入っていた。読書の習慣はここまで広がっていたのである。そして、その莫大な人気を通して、出版界は英国の小説購読者数を把握することができ、出版界はいきおい活気づいてくるのである。

## IV

1830年代、小説の地位は低く、“things so insignificant as *Novels*”<sup>30</sup>とか、“unworthy of any grave critical notice” とみなされるのが一般的通念であった。一つには、ジャンルとして低く評価されていたこと、つまり詩・劇のように真理を描き出すのではなく、変転してやまない風俗(manners)を写す文芸だという判断があったことによる。また一つには、当時莫大な量の三文小説が Circulating Libraries 用に作り出されていたからである。1780年から1820年の間に、福音主義をとなえる中産階級が英国読者層の重要部分を占めるようになり、“love of novel”は“one step below drunkenness and adultery”と考える偏見が強く広がっていたことと合せ、小説を読めば歴史とか実用書物をよまなくなる風潮を生み出すことになるとの功利思想も強く、ミルに代表されるように、小説は表面だけを描いて人間の内面を描かないとする判断が強かった。

そのような風潮の中にあって、さし絵つきの上に分冊出版形式をとったことも手伝って、*Pickwick* は当初は低い評価しか受けなかった。しかし執筆がすすむにつれて、“Boz marches on triumphantly” (*Metropolitan Magazine*, Sept. 1836)<sup>31</sup>、“verisimilitude”があり、しかも下層生活を描いて下品にならない点 (*Court Magazine*, Apr. 1837)、フリート獄の描写の秀逸さ (*Examiner*, July 1837) がたたえられ、*National Magazine* (Dec. 1837) に至っては、観察のうまさ、秀れたヒューモア、機智、暖かさ、人間性の善良で美しいものすべてへの共感、人物描写、ペイソス、描写の正確さをほめ、“His works are volumes of human nature, that have a deep and subtle philosophy in them.”と書いている。筆をおいた時、24才の Dickens は英国文壇の頂点に坐していた。一体、彼をそこまで高めた原因は何であったか。

*Pickwick* は18世紀の小説及び当時流行していた大衆文芸の伝統に立脚

しているが、とりわけこの作品を人々に熱狂的に受け入れた理由は、過去の文芸との絶縁にある。それまで開放的に扱われていた猥雑さ、男性的な荒々しさは抑制され、より温和で、無邪気で、慈愛あふれる場面がこれに代っている。例えば Mr. Pickwick が Miss Witherfield の寝室に入り、あわてふためく様は、全くの笑劇と化し、主人公の潔白さと誠実さが笑いの中でますますくっきりと浮かび上り、作品中にまきちらされた罪のない失敗の場面と同列におかれて何ら不思議に思われないのである。

こうした変容は、初版本の序に明確に記されている。Dickens は「作品中どの出来事も、どの場面も、いかに慎しみ深い方の頬にも赤みをおびさせることはありませんし、またいかに繊細な方の感情をも傷つけることはないと信じています」と書いている。この序が、実は摂政時代からヴィクトリア朝時代への趣味の変化を最も正確に語っている。*Pickwick* は、摂政時代の放蕩、遊興、喧騒が否定され、生活のまじめさと清潔さが尊ばれるヴィクトリア朝時代がはじまる、その出発点に位置している。女王即位と奇しくも一致したこの作品は、作家の側では多分無意識であったであろうが、新しい時代の息吹きを完全に吸取消化し、それによって小説史上の新たな出発点を画しているのである。

この変容の必要は、例えば次のように表現されている。

Three words—nay, three letters—would have lost him his tens of thousands of readers in nearly every class of society, and they would have lost all the good and all the delight they have derived from his writings.<sup>32</sup>

この変容、つまり猥雑、不道德、喧騒からの離脱が新しい時代の空気であった。同じころ *Punch* 誌(創刊 1841) が成功をみるのは、父親が安心して家に持ち帰れるところであったのである。

[Punch] is the first comic we ever saw which was not vulgar. It will provoke many a hearty laugh, but never call a blush to the most delicate cheek.<sup>33</sup>

Tennyson が “To the Queen” (1851) で高らかに歌うまでもなく、ヴィクトリア朝の道徳規範は清浄であった。そして、その規範に従っているからこそ、Dickens の作品は家庭で何度もくり返して読まれることになり、個人が蔵書として家庭においたのであった。

*Pickwick* の成功した別の理由は、Samuel Weller の登場である。彼は『ドン・キホーテ』の従者サンチョとは異り、機知、策略、経験に富み、生活力はたくましく、主人への忠誠は強靱で、しかも父に対する愛情はこまやかである。彼に質問でもすれば、寸暇をおかず具体例とヒューモアをそえて答がかえってくる。主人が善と信頼と博愛を雄弁に語れば、従者もまた俗語ながら、豊かな経験世界を通して体得した金言、教訓、比喩表現を用いて、直截な心情を朗々と語る。主人と従者の関係は、無垢と経験、理想と現実、理念と実践といいかえてもよく、緊密な関係で結ばれた二人は、物語の展開と共に、人間的魅力と共感をますます深めてゆく。

Doré の描いた、橋脚の下で眠る浮浪者の如く、サムは最下層社会の苛酷な生を渡ってきたであろう。いわばその最下層の民が小説に登場し、端役どころかほとんど主役に近い役割を演じ、加えて紳士である主人公に現実世界を教える案内者となっているのだ。*Pickwick* 以前にはみられなかったこの現象を、サムと同じ境遇にいる人達は、どんな感慨をこめて受け取ったことであろう。*Pickwick* は声なき人々に誇りと自尊の念を与えたはずである。一方、身分の高い人々は、日頃は蔑視する下層民の中にも、サムの類まれなる美質をみて、内心頼もしく思ったはずだ。上下共に人間の尊厳に思い至ったであろう。はからずも、上下貴賤・年令をとわず、何万という人々に熱狂的に読まれたという事実は、ヴィクトリア朝の二国民

という悲しい現実をいささかなりともつき崩す力となった。高きも低きも共に笑うことによって、両者の融合を推進する役割を、この作品ははたしているのである<sup>34</sup>。

*Pickwick* の魅力は何よりも笑いである。単純さの典型たるピックウィック一行は、いたるところで滑稽な失敗をくり返し、読者を笑いの渦にまきこんでゆく。彼等の奇癖、無邪気さ、人のよさ、楽天性は、たえずだまされ失敗する原因となって笑いをまきおこすが、その笑いの背後には、常に彼等の悪にそまらぬ健康な生命が光り輝いている。とりわけ一行のリーダーであるピックウィック氏は、正義感にもえ、慈愛心の深い人物である。その彼が奸計にあっては怒りにふるえ、恥辱にあっては満面朱にそまる。そんな時、外面はいかにも滑稽であるが、逆に彼の内面にある本質的特徴——純真さ、正義感、善良さ、博愛心——は、読者に最も純粋な形で印象づけられる。世の奸計、圧力、偽善、慣例、因襲の力は、彼を挫折させるどころか、彼の善人たる資質をますますくっきりと浮きぼりにする。寛容、善意、仁愛あふれる好紳士は、彼をだました Job Trotter や Jingle をも許し、彼等に新しい生き方をさとしてやるのである。

*Edinburgh Review* は、「Dickens の作品は我々を実際に慈悲深い人間にしてくれる<sup>35</sup>」とのべているが、この慈悲の感情基盤は *Pickwick* に強くゆきわたっている。同じ初版の序で、Dickens は「わずか一人の読者であろうとも、その人に同朋の人間のことをもっとよく考え、人間性のもっと明るい、やさしい面をみさせることになれば、そのような結果を導いたことに誇りと喜びを感じるであろう」とのべている。こういった人道主義をおしすすめる考え方、とりわけピックウィック氏に体现された善の感情はごく新しいものであって、1832年の改正法案の希望と挫折を通して一般的となった社会的感情である。John Morley はこうのべている。

A great wave of humanity, of benevolence, of desire for im-



provement—a great wave of social sentiment, in short—poured itself among all who had the faculty of large and disinterested thinking.<sup>36</sup>

すでに世は、18世紀の機智や諷刺の、冷くとげとげしいものに代り、善を肯定し、生の苦痛を和らげる、暖かい感情世界に詩的高みを与えようとしていた<sup>37</sup>。そういうわけで *Pickwick* の人間関係の素朴さ、大らかさ、そして善の国の可能性をみなぎらせた楽天観は、初期ヴィクトリア朝の理想主義を具現するものとして、人々の好感をよんだのであった。

注

- 1 George H. Ford, *Dickens and His Readers* (1955; rpt., New York: Norton & Co., 1965), p. 5.
- 2 Robert L. Patten, *Dickens and His Publishers* (Oxford: Oxford University Press, 1978), p. 68.
- 3 Philip Collins ed., *Dickens: The Critical Heritage* (London: Routledge and Kegan Paul, 1971), p. 64.
- 4 剽窃物については以下に詳しい。Louis James, *Fiction for the Working Man* (1963; rpt. Harmondsworth: Penguin University Books, 1973), pp. 52-69. W. Miller comp., "Imitations of *Pickwick*," *Dickensian*, 32 (1935), 4-5. F. Gordon Roe, "The Penny *Pickwick*," *Dickensian*, 22 (1926), 153-6.
- 5 小松原 茂雄「解説」『ピクウィック・クラブ』北川 悌二訳, 東京: 三笠 書房, 1971, pp. 783-4. Steven Marcus, *Dickens: From Pickwick to Dombey* (London: Chatto & Windus, 1965), pp. 22-30.
- 6 John R. Harvey, *Victorian Novelists and Their Illustrators* (London: Sidgwick & Jackson, 1970), p. 12.
- 7 Leslie A. Marchand, *The Athenæum: A Mirror of Victorian Culture* (1941; rpt., New York: Octagon Books, 1971), p. 301.
- 8 John Camden Hotten, "The Life and Adventures of the Author of "Doctor Syntax," in William Combe, *Dr. Syntax's Three Tours: In Search of the Picturesque, Consolation, and a Wife* (London: Chatto and Windus, n. d.), xxvi.

- 9 B. C. Saywood, "Dr. Syntax: A Pickwickian Prototype?" *Dickensian*, 66 (1970), 24-29.
- 10 John Camden Hotten, "Introduction," *Tom and Jerry: Life in London* (London: John Camden Hotten, 1870), p. 9.
- 11 William Feaver, "Cruikshank: The Artist's Role," *Cruikshank* (Arts Council of Great Britain, 1974), p. 12.
- 12 Hotten, "Introduction" to *Tom and Jerry: Life in London*, pp. 9-15.
- 13 Louis James, *op. cit.*, p. 69.
- 14 Graham Everitt, *English Caricatures and Graphic Humourists of the Nineteenth Century* (London: Swan Sonnenschein & Co., 1893), p. 112.
- 15 William M. Thackeray (1860), cited in Hotten's "Introduction," p. 5.
- 16 Everitt, *op. cit.*, p. 112.
- 17 G. H. Ford, *op. cit.*, p. 12.
- 18 Robert S. Surtees, *Jorrock's Jaunts and Jollities* (London: George Routledge & Sons, n. d.).
- 19 Louis James, *op. cit.*, p. 29.
- 20 Everitt, *op. cit.*, p. 229.
- 21 Richard D. Altick, *The English Common Reader* (1957; rpt., Chicago: University of Chicago Press, 1963), p. 263. 以下活字と読者の関係はこの書物に負うところ大である。
- 22 当時5シリングでバターが5ポンド、牛肉が10ポンドかえた。1832年の時点で人々の給料は、ロンドンの熟練技師で、週給30~33シリング、グラスゴーの大工で14シリング、はたおり女工で5.5シリングである。See Altick, *ibid.*, p. 276; G. M. Young ed., *Early Victorian England*, vol. 1 (1934; rpt., London: Oxford University Press, 1951), pp. 126-34.
- 23 Margaret Dalziel, *Popular Fiction 100 Years Ago* (London: Cohen & West, 1957), pp. 5-7.
- 24 Altick, *op. cit.*, pp. 327-8.
- 25 "It was said in 1830 that a middle-class household with an income of £200-£300 p. a. could not afford a taxed daily paper at 7d. per issue." (Raymond Williams, *The Long Revolution* [London: Chatto & Windus, 1961], p. 190)
- 26 Joel H. Wiener, *The War of the Unstamped: The Movement to Repeal the British Newspaper Tax, 1830-1836* (Ithaca: Cornell University Press, 1969), p. 7.

- 27 Altick, *op. cit.*, p. 329.
- 28 *ibid.*, p. 335.
- 29 Wiener. *op. cit.* p. 173.
- 30 *Edinburgh Review* (1842), quoted in Richard Stang, *The Theory of the Novel in England, 1850-1870* (New York: Columbia University Press, 1959), p. 3. 以下, 当時における小説の地位については Stang (pp. 3-11) による.
- 31 以下, 当時の書評については次を参照した. Philip Collins ed., *Dickens: The Critical Heritage*. W. Dexter, "Some Early Reviews of *Pickwick*," *Dickensian*, 32 (1936), 216-8, 281-5.
- 32 R. H. Horne, *A New Spirit of the Age* (1844; rpt., Gregg International Publisher Ltd., 1971), p. 12; Ford, *op. cit.*, p. 31.
- 33 R. G. G. Price, *A History of Punch* (London: Collins, 1957), p. 30.
- 34 Amy Cruce, *The Victorians and Their Books* (1935; rpt., London: George Allen & Unwin, 1962) p. 154; Ford, *op. cit.*, p. 15.
- 35 lxviii (1838), p.77, quoted in Ford, *op. cit.* p. 13.
- 36 John Morley, *The Life of Richard Cobden* (1879), quoted in Steven Marcus, *op. cit.*, p. 45.
- 37 Donald J. Gray, "Humor as Poetry in Nineteenth-Century English Criticism," *JEGP*, 61 (1962), 249-257.